

# 軍事史学

第44卷 第4号

## 巻頭言

### 海！輝けるその未来に！

「シー・パワー特集号」の巻頭言に、私はこの言葉を掲げます。これは、四〇年間、日本の海上防衛の現場に携わってきて、最後に辿り着いた海への想いです。米国の海洋戦略家マハンが提唱した「シー・パワー」の概念は、国家が生存と繁栄のために海洋を支配し、自在に活用する能力の総称とされています。これには海洋を利用するためのあらゆる要素、つまり、海上戦力、商船隊、漁船隊、海洋観測隊、資源探査隊、洋上救難隊、造船、装備品などの工業力、港湾施設等が含まれています。更に重要なことは、国土、国民の特性にも大きく関わり、海との地理的関係や国民の海洋への理解度、関心度、愛着と言ったようなものが、「シー・パワー」に大きく影響してくることになるのです。

マハンが生きた帝国主義の時代は、海上戦力が大変大きな比重を占めていましたが、現代の国際協調をベースにした時代では、海洋特有の包容力が重要視され、海上戦力以外の要素の意味の大きさが増えています。つまり外交の手段として、その後ろ盾である海上戦力に依存することが多かつた時代から、国際関係の安定を国益達成の必須条件とした上で、軍、官、民、学など関連各分野の広がりと、先に述べたあらゆる要素の相互連携が重視されてきています。日本は、海を隔てて大陸に接し、且つ大洋に囲まれた小さな島国であります。生存を海に依存し、その恩恵を最大限に享受することにより、多数の国民が質の高い生活を営んできております。今、「日本のシー・パワー」を見ると、日米安保体制の下に、海上戦力の実体は海上自衛隊が軸になって、防衛と国際協力を活動の主体に維持されており、その規模全体は大きくはありません。一方で、工業力など他の各分野では高い質的能力を有しております。これら国家規模の総合力においては、世界的に高い評価を得ていると言えましょう。その意味において、わが国古来の「和」の精神と、海が本質的に持っている包容力とを共鳴させることにより、今後日本のシー・パワーは高く評価され、その果たすべき役割は増大して行くことになると予測されます。しかしながら、わが国の現状を仔細に分析検討すると、国民意識の海離れに起因する解決しなければならぬ多くの課題……保有船舶量、船員数の激減など……があるように思われます。海の輝かしいロマンを今一度思い起こすその解決策を、国民一同で相協力し、丁寧に探求し、それを実行していく努力が必要であると考えます。これは、人生の大半を、海の世界で過ごしてきた者の一人としての、切なる願いでもあります。

(元海上幕僚長 藤田幸生)